f-6) コオイムシ

i) 重要性

本種は、「環境庁報道発表資料　無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリスト見直しについて」(環境庁　平成 12 年 4 月)[5)]に準絶滅危惧として掲載されている。

ii) 生態

本種は、本州、四国、九州各地に分布[55)]する。佐賀県内の分布に関する詳細な情報は得られなかった。

小川、谷津田、池沼、水田等の一般に流れの緩やかな浅い場所に生息している[55)]。肉食性で、成虫、幼虫共に他の水生昆虫や貝類等を捕えて、その体液を吸っている[55)]。幼虫はほとんどが肉食性であるため、他の幼虫に襲われたり、まわりに獲物が少ないと共食いを始める[55)]。雌は 4 月初めから 6 月にかけて卵を雄の背中に産み付ける[55)]。雄が背負った卵の上端部は淡褐色で他は白色を帯び、長さ 4㎜、直径 1.8㎜ 程度の大きさである[55)]。下端部は膠質のもので接着され互いに密着してなかなかとれない[55)]。これを背負った雄は日中は水温の高い浅瀬を静かに遊泳し、時々水面すれすれに出てきて、卵を日に当てるような動作を続けながら約 1 カ月あまりの間、卵を守り続けて暮らす[55)]。

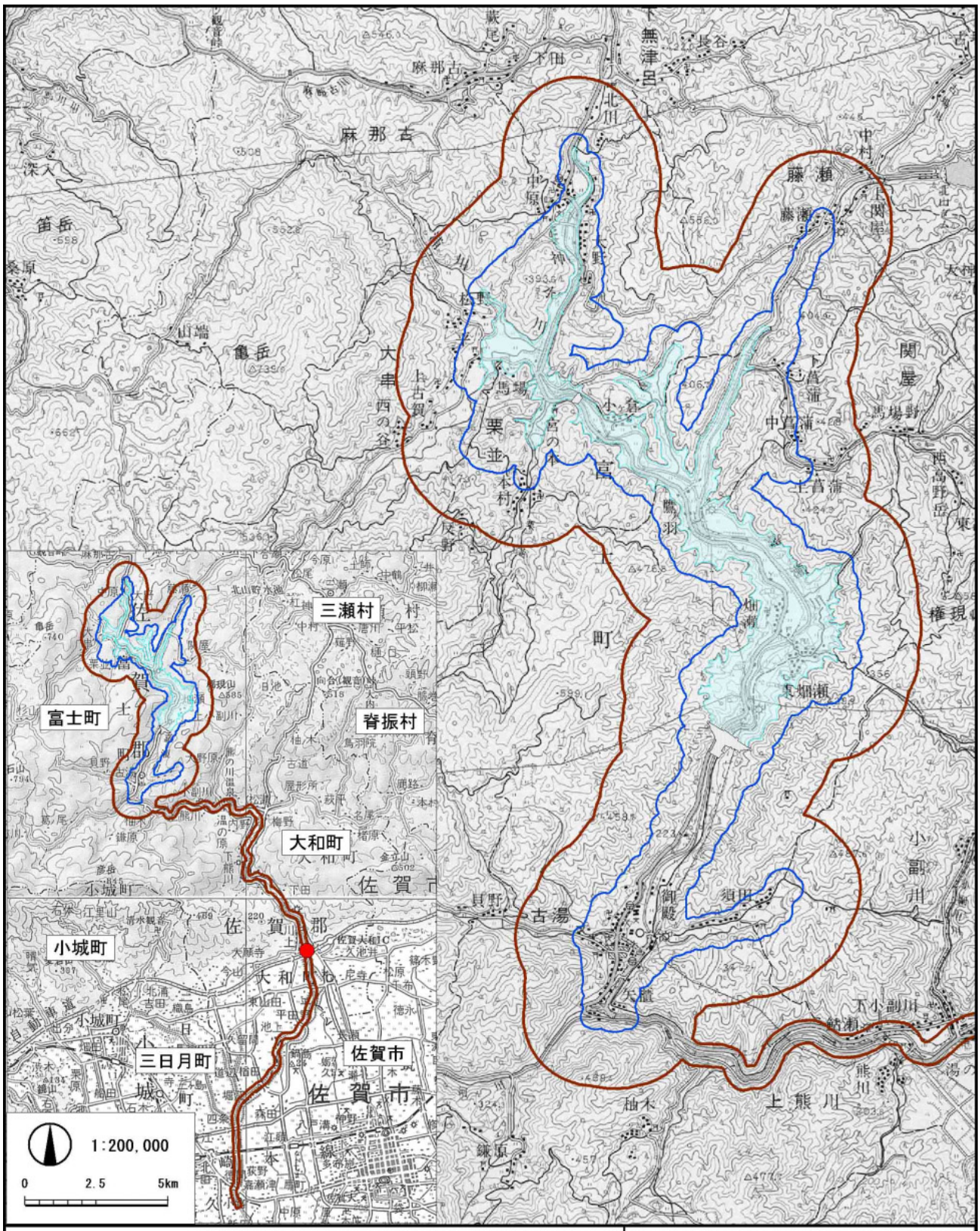
iii) 調査結果

調査による確認地点を図 4.1.5-8(6)に示す。

本種は、平成 13 年度の調査において、嘉瀬川の川上頭首工下流 1 地点で生息が確認された。

確認環境は、岸辺のヨシ帯等の抽水植物の中であった。確認個体数は 1 個体である。

生態情報及び確認状況から、本種は、主に嘉瀬川下流部の水際部の抽水植物帯等、流れの緩やかな水域に生息すると考えられる。



凡　例

- ：ダム堤体
- ：副ダム
- ：貯水予定区域
- ：対象事業実施区域
- ：調査地域
- ：確認地点

1:50,000

0　1　2km

図4.1.5-8(6)
コオイムシ確認地点

f-7) トゲナベブタムシ

i) 重要性

本種は、「環境庁報道発表資料　無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリスト見直しについて」(環境庁　平成 12 年 4 月)[5]に絶滅危惧 II 類、「佐賀県の絶滅のおそれのある野生動植物－レッドデータブックさが－(佐賀県環境政策局環境企画課　2000 年 12 月)」[6]に絶滅危惧 II 類種として掲載されている。

ii) 生態

本種は、1994 年 6 月に兵庫県で生息が確認されたが、他地域からの生息情報は長い間途絶えている[55]。佐賀県内では嘉瀬川[58)59)60)]、佐賀市多布施川[6]における記録がある。

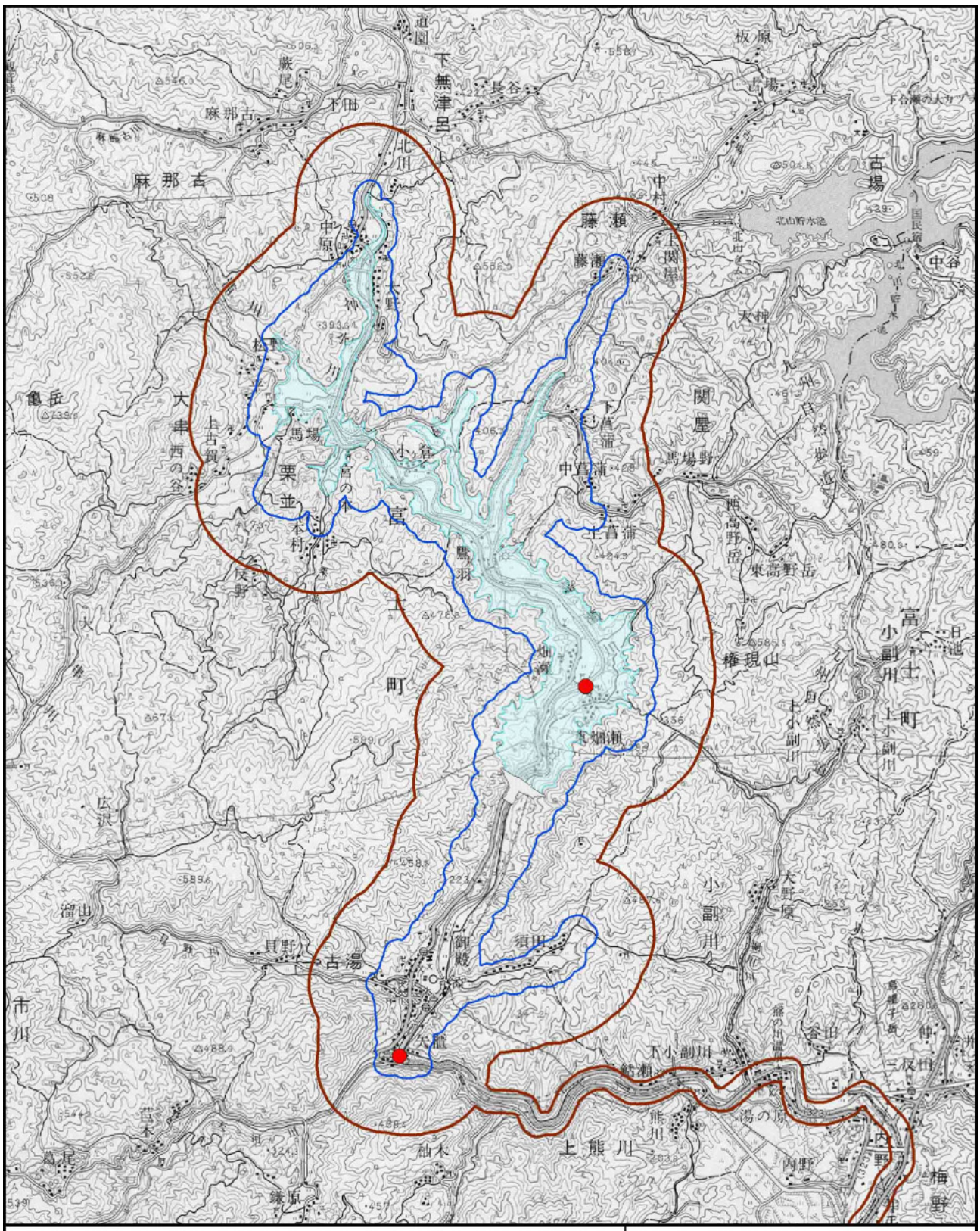
成虫、幼虫とも砂地の底質に浅く潜りユスリカ幼虫等を捕らえ吸汁する捕食者である[6]。

iii) 調査結果

調査による確認地点を図 4.1.5-8(7)に示す。

本種は、文献[58)59)60)]において嘉瀬川の畑瀬橋付近 2 地点、川上川第一ダム上流周辺 1 地点、合計 3 地点で確認された記録があるが、現地調査では確認されていない。また、佐賀県内では、佐賀市多布施川[6]における記録がある。

生態情報及び確認状況から、本種は下流の多布施川を主な生息地としていると考えられる。



凡　例

- ：ダム堤体
- ：副ダム
- ：貯水予定区域
- ：対象事業実施区域
- ：調査地域
- ：確認地点

1:50,000

0　1　2km

図4.1.5-8(7)
トゲナベブタムシ確認地点

f-8) クロゲンゴロウ

i) 重要性

本種は、「佐賀県の絶滅のおそれのある野生動植物－レッドデータブックさが－(佐賀県環境政策局環境企画課　2000 年 12 月)」[6)]に絶滅危惧 II 類種として掲載されている。

ii) 生態

本種は、本州、四国、九州に分布 [61)]する。佐賀県内では、東松浦郡七山村樫原湿原、浜玉町鳥巣、佐賀郡富士町杉山、神埼郡脊振村一谷 [6)]における記録があり、脊振山地でのみ発見されており、産地限定、個体数も多くない [6)]とされている。

水生植物の生えた池沼、放棄水田、水田の溝等に生息する [61)]。幼虫は 5 月～8 月に見られ、新成虫は 8 月～9 月に出現し、成虫で越冬する [61)]。

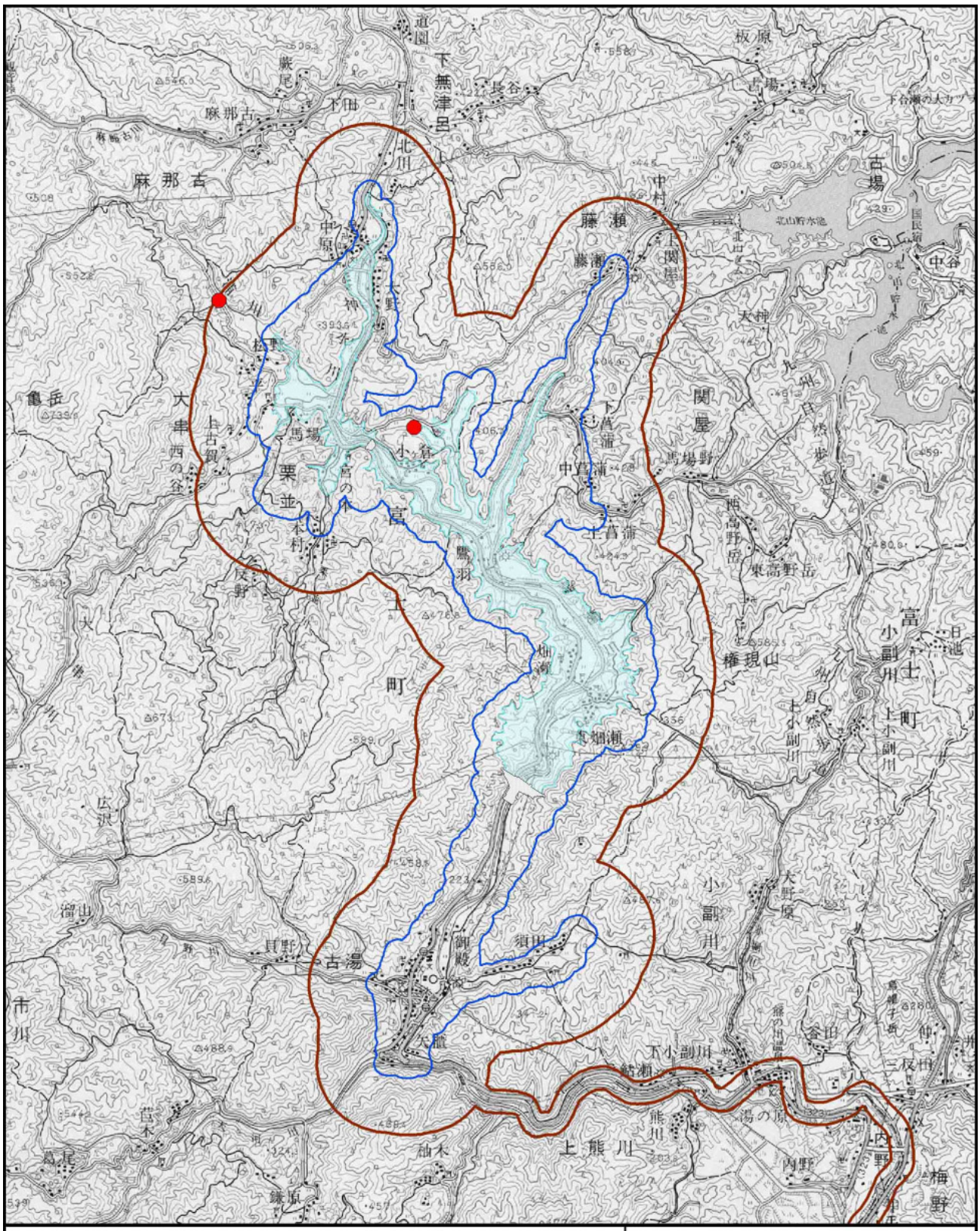
iii) 調査結果

調査による確認地点を図 4.1.5-8(8)に示す。

本種は、平成 14 年度の調査において、浦川の松野集落北側周辺 1 地点で生息が確認された。また、平成 15 年度の環境巡視において、大野地区の音無の西周辺 1 地点で確認された記録がある。

確認地点の環境は、スギ林内を流れる薄暗い水面幅 1m～2m の沢で、砂防ダムにより淵が形成され、枯葉や古木が多く沈んでいる環境及び放棄水田であった。

生態情報及び確認状況から、本種は、当該地域において、湿性地等に局地的に生息すると考えられる。



凡　例

- ：ダム堤体
- ：副ダム
- ：貯水予定区域
- ：対象事業実施区域
- ：調査地域
- ：確認地点

1:50,000

0　1　2km

図4.1.5-8(8)
クロゲンゴロウ確認地点

f-9) ゲンジボタル(幼虫)

i) 重要性

本種は、「環境庁報道発表資料　無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリストの見直しについて(環境庁　平成 12 年 4 月)」[5]や「佐賀県の絶滅のおそれのある野生動植物－レッドデータブックさが－(佐賀県環境政策局環境企画課　2000 年 12 月)」[6]に掲載されていないが、「生息地の破壊が進んでおり、衰亡傾向にある」という専門家の指摘により重要な種とした。

ii) 生態

本種は、本州、四国、九州に分布[47]する。佐賀県内の分布に関する詳細な情報は得られなかった。

幼虫は流水中にすみ、カワニナ等を食する[47]。採餌は夜間に行われる[55]。生息段階に応じた大きさのカワニナを選択して食べていると思われるが、1 個体当たりが成熟までに必要なカワニナの量は親貝に換算すると 10 個体程度である[55]。飼育下では、ヒメタニシ、マルタニシ、インドヒラマキガイ等も摂食する[55]。光による交信等により、雌に出会った雄は交尾する[55]。雌は水際のコケ等に約 500 個、多い時には 700 個程度の卵を産付する[55]。

iii) 調査結果

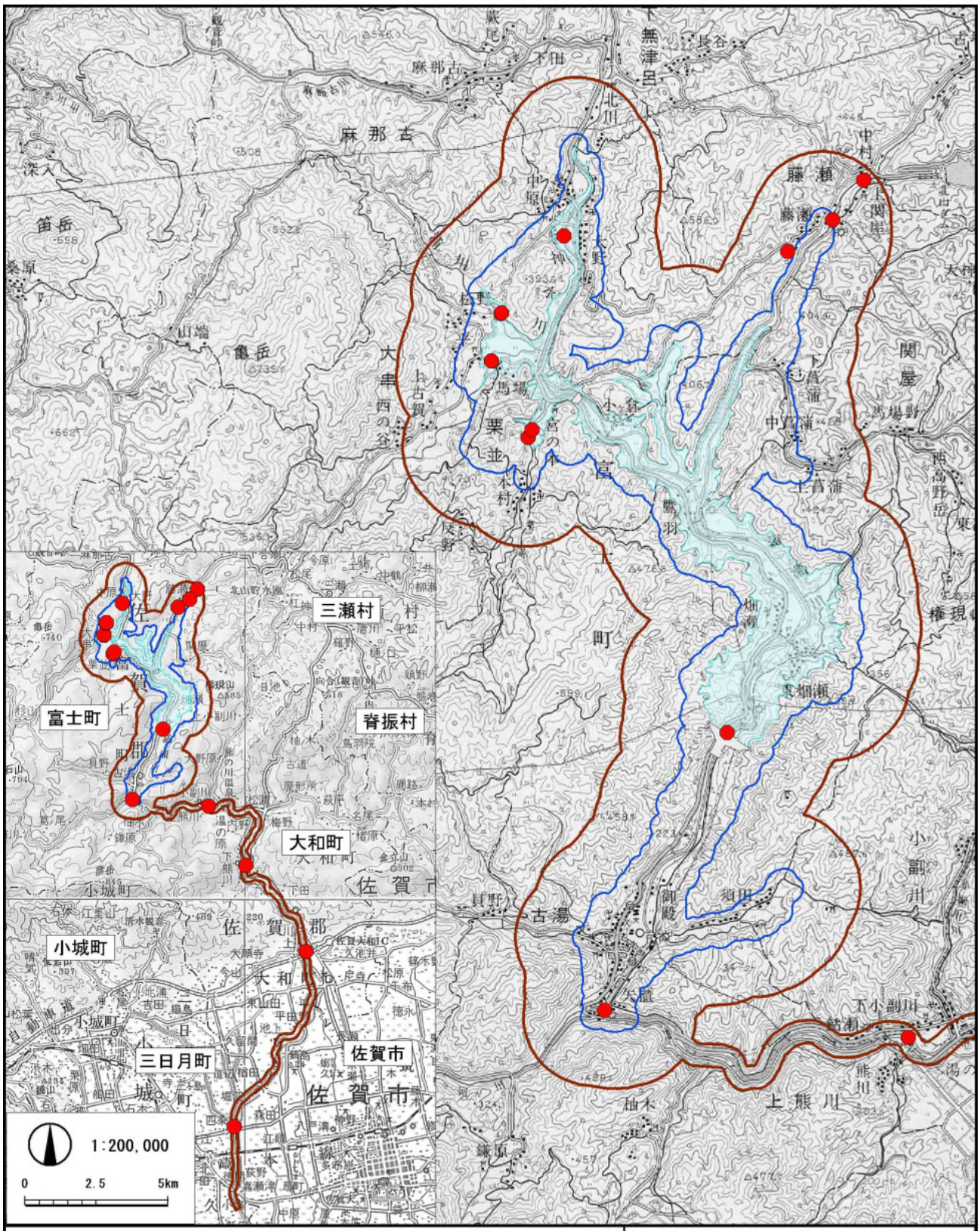
調査による確認地点を図 4.1.5-8(9)に示す。

本種は、平成 4 年度、8 年度及び 12 年度～14 年度の調査において、藤瀬地区の中村集落周辺 1 地点、藤瀬集落西の谷戸 1 地点、嘉瀬川の新小関橋上流 1 地点、川上川第二ダム下流 1 地点、鮎の瀬橋下流 1 地点、川上頭首工下流 1 地点、嘉瀬大橋付近 1 地点、神水川の大野集落周辺 1 地点、浦川の浦川橋付近 3 地点、大串川の大串橋付近 2 地点、栗並川の宮ノ本集落周辺 3 地点、合計 16 地点で生息が確認された。また、詳細な位置情報等の記録がないが、平成 9 年度の環境巡視において、古湯周辺で 100 個体～150 個体の成虫が確認された記録がある。このほか、文献[56)62]において嘉瀬川の川上川第一ダム上流周辺 1

地点、川上川第一発電所付近 1 地点、合計 2 地点で確認された記録がある。

確認地点の環境は、主に水深が 20cm 前後の、砂礫底の平瀬であった。各地点の確認個体数は 1 個体～2 個体である。

生態情報及び確認状況から、本種は、主にカワニナの生息する河川に生息すると考えられる。



凡　例

- ：ダム堤体
- ：副ダム
- ：貯水予定区域
- ：対象事業実施区域
- ：調査地域
- ：確認地点

図4.1.5-8(9)
ゲンジボタル確認地点

(3) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況

1) 調査の手法

a) 調査すべき情報

注目すべき生息地は「(1)脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況」の調査結果、文献等の情報を踏まえて、天然記念物、生息地等の保護区域等を抽出した。調査対象とする注目すべき生息地を表 4.1.5-16 に示す。

注目すべき生息地の状況を把握するため、注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況を調査した。

表 4.1.5-16　調査対象とする注目すべき生息地

No.	注目すべき生息地	a 天然記念物	b 種の保存法	c 重要湿地	d その他注目すべき生息地
1	カササギ生息地	○			

注)1.a:文化財保護法又は文化財保護条例に基づく天然記念物
　　○:天然記念物
　2.b:絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律に基づく生息地等保護区
　3.c:特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約(昭和 55 年 9 月 22 日条約第 28 号)に該当する湿地
　4.d:その他、専門家の意見等により、学術上又は希少性の観点から注目すべき生息地と認められる生息地

b) 調査の基本的な手法

調査の基本的な手法は、文献その他の資料及び現地調査による情報の収集、整理及び解析によった。また、専門家からの聴取により情報を補った。収集した文献その他の資料を表 4.1.5-17 に、現地調査の手法を表 4.1.5-2 に、現地調査の

内容を表 4.1.5-3 に示す。

表 4.1.5-17　収集した文献、資料一覧

調査すべき情報		文献、資料
注目すべき生息地	カササギ生息地	天然記念物緊急調査　植生図・主要動植物地図-41.　佐賀県　(文化庁　1978 年 5 月) 日本の天然記念物　(加藤陸奥雄、沼田眞、渡辺景隆、畑正憲　監修　1995 年 4 月　株式会社　講談社)

c) 調査地域・調査地点

「(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物にかかる動物相の状況」と同様とした。

d) 調査期間等

「(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物にかかる動物相の状況」と同様とした。

2) 調査結果

a) カササギ生息地

i) 重要性

カササギ生息地は、大正 12 年に文化財保護法において、「家畜以外の動物で海外よりわが国に移殖され現時野生の状態にある著名なもの及びその棲息地」として国の天然記念物に指定されている。

ii) 注目される理由となる動物の生態

カササギは、日本では九州のみで留鳥として繁殖する [12)]。佐賀県を中心とする周辺の熊本県、長崎県及び福岡県に限られ [12)]、その生息数は、一万数羽と推定されている [63)]。

海岸近くの平坦な農耕地、干拓地、樹木の多い村落や市街地にすみ [12)]、主として昆虫や果実等を食べるが、魚、カエル、トカゲ、鳥の卵、雛等も食べる [12)]。繁殖期は 2 月～6 月 [12)]である。佐賀平野ではクリークの多い水田地帯の集落で樹上に営巣する [63)]。巣は、樹上の太枝や電柱等の地上 4m～20m ぐらいの所に、枯れ枝を積み重ねて大きい皿形に、雌雄で作る [12)]。標高 100m 以上の場所には

営巣は見つかっていない[14)]。

iii) 調査結果

カササギ生息地の指定地は、佐賀県佐賀市、鳥栖市、多久市、武雄市、鹿島市、佐賀郡、神埼郡、三養基郡、小城郡、杵島郡、藤津郡及び福岡県大川市、久留米市(大善寺地区)、筑後市(西牟田地区)、柳川市、三潴町、城島町、大木町、三橋町、瀬高町、山川町、大和町であり、指定地の総面積は約 1,800km^{2}である。

本種は、平成 11 年度の調査において、嘉瀬川の川上頭首工上流 3 地点及び下流 2 地点、石井樋下流 3 地点、嘉瀬橋上流 6 地点、合計 14 地点で確認された。

このほか、詳細な位置情報等の記録がないが、平成 5 年度、6 年度及び 11 年度の調査において名護屋橋付近及び嘉瀬橋上流で確認された記録がある。

確認地点の環境は、河川敷のイネ科草本等の草地や河川周辺の耕作地であった。また、嘉瀬橋上流に流れ込む水路脇の広葉樹で巣が確認された。

昭和 60 年度、61 年度、平成 5 年度、6 年度、9 年度及び 11 年度～14 年度に現地調査を実施しているが、対象事業実施区域及びその周辺の区域では、カササギの個体、鳴き声及び巣は確認されていない。

生態情報及び確認状況から、本種は、主に嘉瀬川下流部周辺に生息すると考えられる。